＜教育相談＞

お互いのよさを認め合う学級づくり

── ３年生における構成的グループ・エンカウンターを通して ──

豊見城村立とよみ小学校教諭　金　城　美智子

Ⅰ　テーマ設定の理由

現代社会は，科学技術の進歩，高度情報化などにより，価値観が多様化してきた。家族の構造も核家族化してきた。また，少子化が進み，児童の成長にとって大切な人と人とのふれあいが，近年，希薄化の傾向にある。それに伴い，いじめや不登校など，問題はますます深刻化してきている。これらの問題は，児童の健全な発育を阻害し，人格形成においても悪影響を及ぼす傾向があるため，大きな社会問題になっている。教育は児童生徒の人格の完成をめざすことであり，これらの課題に早急に対応していくことが学校現場に求められている。

３年生のこの時期は，大人の保護から独立し，自主性が芽生えてくる。遊びの中から，仲間づくりが始まり，連帯意識が強くなる反面，仲間以外には排他的になる。その行動を通して，助け合いや協力，他者への思いやり，協調性などの社会性を学び，実践力を身につけていくのである。私がこれまで担任した学級でも，仲良しグループが目立つようになっていた。しかし，中にはおとなしく，自分の意思表示ができない児童や自分から仲間に入ることのできない児童がいる。自己主張はできるが，うまく関わることができずに衝突を繰り返し，阻害されがちな児童もいる。日頃の生活でも，自分達の力で解決する事ができずに担任に訴えてくることが多い。これまでの私の実践で，児童のよさを見つけて誉めたり，帰りの会に「いいことさがし」を取り入れ，友達のよさを発表し合う場を作ったりしたが，一人一人が仲良く学校生活を楽しんでいるとは言えない。これは，お互いのよさを理解し，認め合う温かい人間関係が学級の中に育っていないからだと痛感している。

児童は本来様々なよさや可能性を内に秘め，よりよく生きたい，向上したい，友達と活動したいという欲求を持った存在である。しかし，それは豊かな人間関係ができて初めて自然に生まれるものである。「個は集団の中で育つ」といわれているように，学級での人間関係が個に及ぼす影響は量りしれない。児童は，一人一人が，温かく居心地のいい学級の中で，自分のよさを認められたときに自己存在感を持ち，安心して自分らしくのびのびと活動ができる。それは，児童一人一人が生き生きと自己表出し，自己実現に向かうことにもつながる。そのために，教師は，一人一人の存在を受容的に受け止め，児童が持っているよさを見出し，積極的に児童に関わり，児童がお互いに助け合い，協力し合い，他のよさを見つけ，認め合う，豊かな人間関係づくりの援助をすることが必要になってくる。

そこで，構成的グループ・エンカウンターを学級活動に取り入れ，実践していけば，人間関係が深まり，一人一人がお互いのよさを認め合う学級集団ができるのではないかと考え，本テーマを設定した。

＜研究の仮説＞

構成的グループ・エンカウンターの実践によって

①　自分のよさに気づくことができ，自己有能感を高めることができるであろう。

②　他者のよさに目を向け認めることができ，学級全体の豊かな人間関係が育つであろう。

Ⅱ　研究内容

１　よさを認め合う人間関係

よさには，個人の技術的な能力や生来持っている性質上のものや，対人関係における性格上のものがある。

このように，児童一人一人は，すばらしいよさを持っている。お互いのよさを認め合うには，自分自身のよさに気づくことである。自分のよさを実感すると自分に自信がもてるようになる。さらに周りの人から自分のよさを認めてもらうことで，学級での存在を実感することができ，安心して自分の力を発揮できるようになる。そして，心にゆとりが生まれ，他者のよさにも目を向け認めることができるようになる。その場に，児童相互に温かい心の交流が生まれ，思いやり，協力，助け合いなどの豊かな人間関係が育つのである。

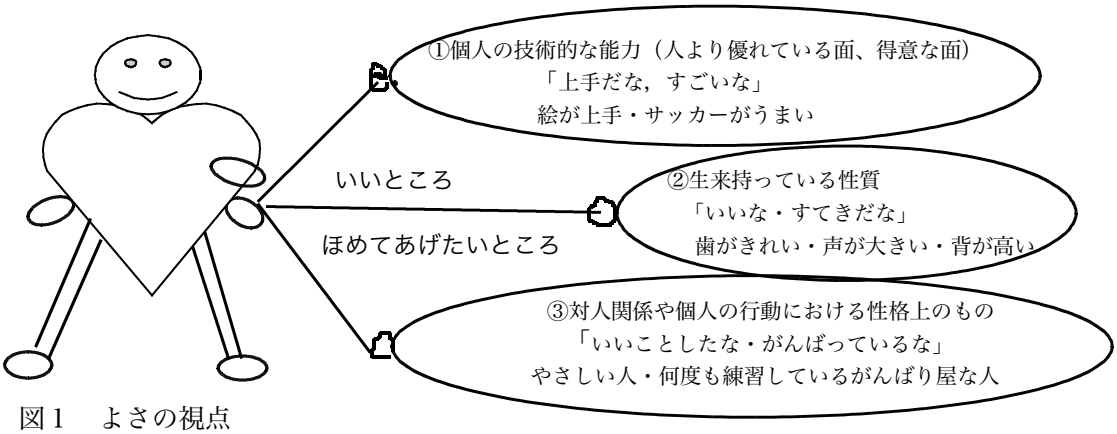


図１　よさの視点

また，自分のよさ，友達のよさを見つける事ができるようになるまでの成長過程と，それに関わる教師の役割をマズローの欲求階層説と結び付けて，「学校・学級における子供の欲求」（岡村克志氏（１９９３年児童心理）を参考にして，次のように表した。

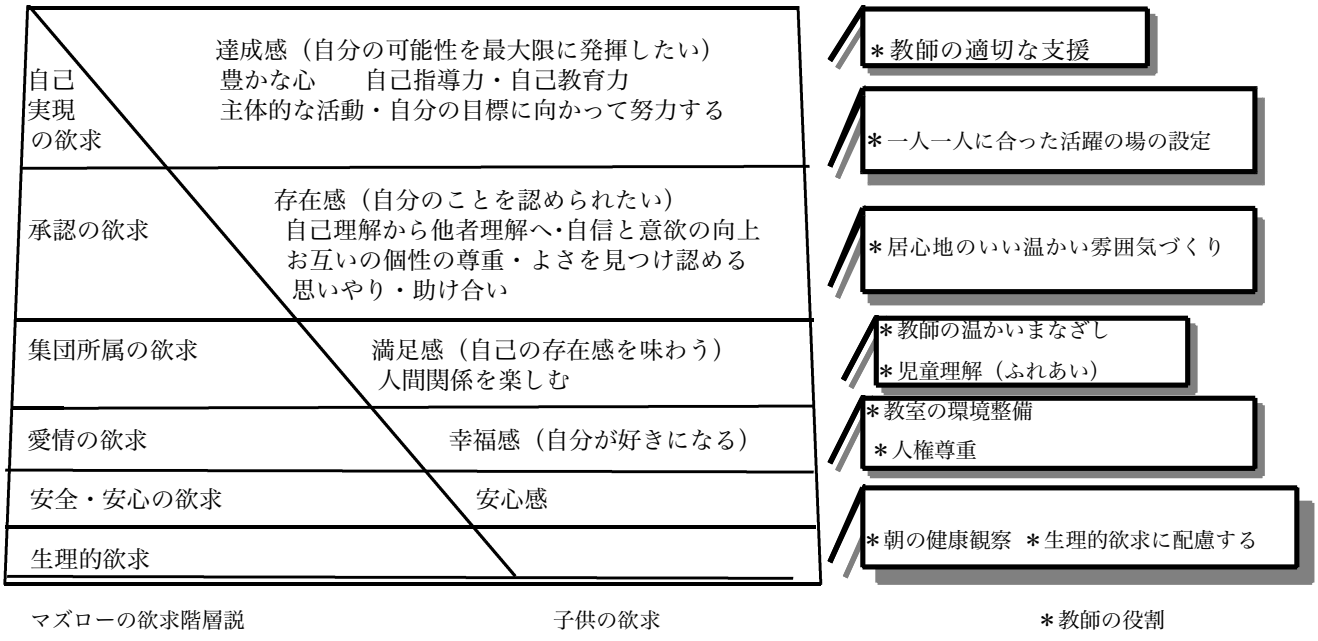


図２　　児童がよさを見つけるまでの成長過程と教師の役割

２　構成的グループ・エンカウンターについて

よさを見つけるのは容易なことではない。よさに気づかせるためには，自分のよさを見つける機会を与えることである。多くの友達とふれあい，多くの人のよさにふれる経験をすることである。その一つの方法として，構成的グループ・エンカウンターがある。これは，ゲーム感覚で教師が意図するねらいを達成することができ，短時間でできることから学校教育の中でも取り入れられている。

構成的グループ・エンカウンターとは，集団の中で人と人が出会い，本音と本音が交流できる人間関係づくりのプログラムである。対人行動を主な内容とする課題（エクササイズ）を誘発剤にして，①自己理解，②他者理解，③自己受容，④自己主張，⑤感受性の促進，⑥信頼関係，⑦役割遂行をねらった集団体験的学習である。つまり，構成的グループ・エンカウンターは，行動の変容と人間的な自己成長をねらっている。

構成的グループ・エンカウンターはエクササイズとシェアリングの二本の柱で構成されている。

エクササイズとは，教師の意図するねらいを達成するために用意された課題のことである。エクササイズの中で行われる対人行動に対して①肯定的な感情や自己認知が持てるようになる。②教師と児童，児童相互の間に温かい信頼感に満ちた援助的関係を作る事ができる。③対人関係の信頼感が成長し，受

容的・理解的態度が増し，自分自身の長所や短所が発見でき，ありのままの自分で良いと思えるようになる。

シェアリングとは，わかちあいやふりかえりのことである。エクササイズを振り返ることによりそこでの気づきや感情を明確化し，ねらいを定着させる働きを持っている。また，一人の児童の気づきや感情を全員が共有する働きもある。

これらのことをふまえて，構成的グループ・エンカウンターを３学年の一ｸﾗｽを対象に検証してみた。

Ⅲ　指導の実際

１　対象　　３年○組　３０名

２　単元名　「友達のいいところを見つけよう」

３　ねらい 児童一人一人がお互いのよさを見つけ，認め合うことができる豊かな人間関係を育てる。

４　単元について

(1) 単元設定の理由

中学年の時期は，何でも見たい，やりたいと言う意欲があり，自主性が芽生え，大人の保護から自立していく時期である。また，『ギャング・エイジ』と言われるように，集団を組んで行動する『われわれ意識』の発達する時期でもある。メンバーの連帯意識が強まり，規則やルールを自主的に改廃し，リーダーを中心とするギャング集団を好んで作り上げる。彼らは，ギャング集団遊びの中で，自己主張する事，相手を思いやること，協力し助け合うこと，信頼し合うこと，ルールを守る事などを学び，人への関わり方や社会性が身についていく。このように，ギャング・エイジは社会性の発達にとってきわめて重要である。しかし，最近では，友達と深く関わる事のできない児童が増えている。確かにこの傾向は，本学級にも見られ，特定の友達としか関わることができない児童や自分から友達を誘うことのできない児童がいる。だからこの時期に，仲間づくりの大切さに気づかせるために，教師の積極的な支援が必要となる。

児童がのびのびと自分らしさを発揮し，楽しく学校生活を送るためには，教師が一人一人の存在を受容的に受け止めることが大切である。そして，児童の持っているよさを見出し，積極的に関わる中で，児童がお互いのよさを見つけ，認め合う豊かな人間関係づくりを援助する事が必要である。

本学級の児童は，素直で明るく活発である。いろいろな学級活動においても協力する事ができ，ほとんどの児童が，学級は楽しいと感じている。しかし，友達とけんかをしたり，自分たちで問題を解決せずに教師に言いつけに来たりすることもある。

そこでアンケート調査を実施し，児童の自己肯定度，他者肯定度，集団肯定度を調べてみた。それによると，ほとんどの児童が，「自分のことがすき」「自分にはいいところがある」「運動や勉強をもっとがんばればできるようになる」と肯定的に捉えていることがわかった。しかし，「自分にはいいところがない」20%，「みんなからあまりほめられない」33.3%の児童が，自分に対して否定的に捉えている。学級集団に対しては，半数以上の児童が助け合う，協力し合うと回答している。

それで，ふれあいを深めるエクササイズを通して，お互いを信頼し，自尊心を高め，自己理解や他者理解を深め，温かい人間関係をつくらせていきたい。そして，温かい雰囲気の中でお互いのよさや友達の思いやりに気づかせ学級での存在感を実感させ，のびのびと自己を発揮させながら楽しく学級生活を送らせたいと考え，本単元を設定した。

(2) 指導仮説

友達とふれあったり，一人一人が認められる構成的グループ・エンカウンターを実践すれば，学級での自己の存在感が高まり，自尊心を高め，児童一人一人がお互いを認め合うことができるであろう。

５　指導計画

次	時	単元名	領域	エクササイズ・資料名	指導目標
一	1	友達をふやそう	学級活動	「こおりおにごっこ」	学級内の児童同士のリレーションを深め，友達との温かい関係を育成する。友達や学級に対して，肯定的に認め合える雰囲気づくりをする。
二	2	友だちをもっと知ろう	道徳	「ドッジボール」	友達とお互いに理解し合い，信頼しあって助け合おうとする心情を育てる。人への思いやり，信頼の大切さを体験することで，信頼関係を育てる。
	3		学活	「目かくしジョギング」	
三	4 本時	友達のいいところ，自分のいいところを知ろう	学級活動	「ほめあげ大会」	友達を肯定的に見ることで，思いやりの心を育てる。友達の良い点を探し，その人に伝え，自分も友達から好きなところを言ってもらうことを通して，自尊感情を高める。
	5		学活	「あなたの○○がすきです」	

	6		学活	「自分への手紙」	自分を振り返り，自己の成長に気づき，肯定的に評価することによって，自信を持って伸ばしていこうとする意欲を高める。

6　本時の学習

(1) 本時のねらい

① 自分のよさに気づき，自己を肯定的に見ることができるようにさせる。

② 友達のよさを見つけ，認めることができるようにさせる。

(2) 本時の展開

学習内容	活動の内容	教師の支援	指導上の留意点
1ねらいの説明	1本時のねらいを理解する。 自分のよいところを見つけよう	・本時の学習のねらいをわかやりすく説明する。	・友達の良さに目を向けさせるようにする。
2ウォーミングアップ	2「キャッチゲーム」をする。	・ゲームのやり方を説明する。 ・和やかな雰囲気を作る。	・やり方が理解できたか。
3エクササイズ『ほめあげ大会』	3『ほめあげ大会』をする。 ・一人4枚の用紙をもらう。 ・グループの友達のほめたいこと（すごいな，　いいなあ，上手だな，がんばっているな）　を2つずつ書く。 ・書き終わったらお互いに交換する。 ・友達が書いてくれた文章を見て，自分がそうだと思うところに◎，まあまあ思うところに○，よくわからないというところは空白にして自己評価の欄に書く。	・エクササイズのやり方を説明する。 ・例を示す。 （絵が上手・字が丁寧 発表の声が大きい・やさしい） ・きちんと友達を見てほめるように伝える。	・お世辞を言わないように，よく考えて書くことができるようにさせる。 ・グループを巡回しながら，よさを見つけきれない児童には，してもらったことや，得意なことなどから見つけるように助言する。
4シェアリング	4みんなの前で，◎をつけたものの中から一つ選んで発表する。 5お互いに認め合う。 6振り返り用紙に，今の気持ちを書く。	・グループで発表させる。 ・自分のいいところをほめてもらった気持ち，友達のいいところを知った気持ち新しい発見をしたときの気持ちについて書かせる。	・◎や○をつけたのがない児童に対して，グループの人から自分のよさに気づかせ，自己肯定ができるよう助言する。
5まとめ		・児童の活動から感じ取ったことや気づいたことを話し，まとめさせる。	・次回につながるよう楽しく終わらせる。

6　本時の授業の結果と考察

『ほめあげ大会』は，ほとんど児童が「楽しかった」,「とても楽しかった」と回答している。(図3)このエクササイズは，適切な課題の選定であったといえる。

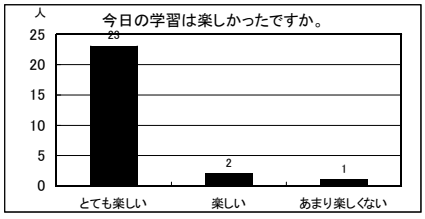


図3　　授業の評価

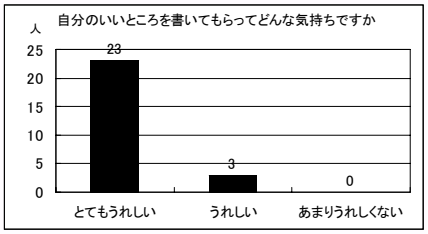


図4　　授業の評価

自分のいいところをグループの友達に書いてもらった気持ちは，全員が「うれしい」,「とてもうれしい」と回答している。自分には，いいところがないと思っていた児童も，自分のよさを書かれたカードを見て表情が生き生きしてきた。自分のよさを相手に認めてもらうことの喜びをほとんどの児童が体験することができたと評価している。(図4)

児童は，今まで，友達のよさを書く体験をしてないためどう書いていいかとまどっていた。友達のよさを見つけきれない児童には,「友達の勉強や運動で得意なものはないかな。がんばっていることや友達にしてもらってうれしかった

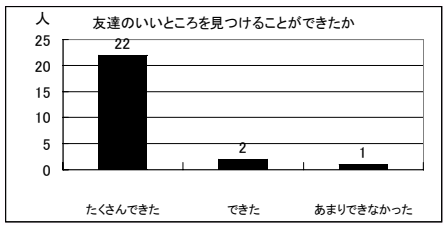
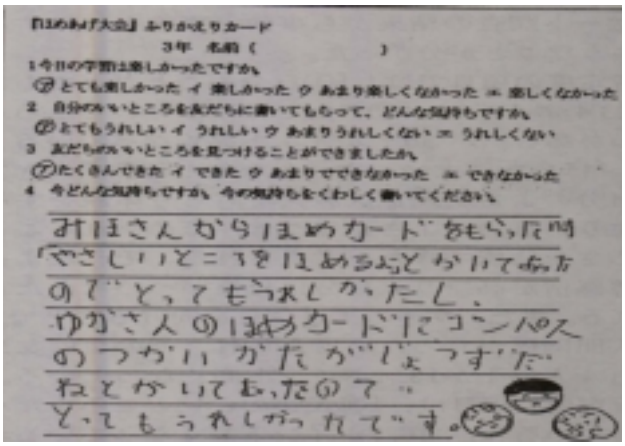


図5　　授業の評価

ことを思い出してごらん。」などのよさを見つける視点を示した。その結果，友達のいいところをほとんどの児童が書くことができたと回答している。(図５)しかし，まだ見つけることのできない児童には，今後もいろいろな活動の中で友達のよさを見つけるように支援をしていきたい。

また，活動を通して自分のいいところをほめてもらった気持ちや友達のいいところを知った気持ち，他に気づいたこと等について，次のように振り返り用紙に書いている。

・ほめられるととってもいい気持ちでした。
・ちょっぴりはずかしくて，とってもいい気持ちでした。



以上のことから，このエクササイズを通して，相手のよさに目を向けることができた。そして，お互いのよさを伝え合うことで，自尊心を高めることができ，豊かな人間関係が作られたと考えられる。

７　授業実践後の結果と考察

構成的グループエンカウンター実践前後の児童の自己肯定度，他者肯定度，集団肯定度のアンケート調査の結果は，下表のようになった。

表１　　調査期日　５月（事前）　７月（事後）　（数値は％）

質問	選択肢	事前	事後	質問	選択肢	事前	事後
①私は私のことがすき	とてもすき	43.3	66.7	⑪みんなは，私の考えや話を聞いてくれる	よく聞く	53.3	43.3
	好き	43.3	26.7		まあまあ聞く	36.7	56.7
	あまり好きでない	3.3	6.7		あまり聞かない	10.0	0.0
②いいところ（得意なこと）がある	たくさんある	20.0	56.7	⑫友だちにありがとうといえる	いつも言える	53.3	60.0
	少しある	60.0	36.7		ときどき言える	43.3	40.0
	ない	20.0	6.7		あまり言えない	3.3	0.0
③みんなからほめられる	よくほめられる	0.0	10.0	⑬友だちにごめんなさいと謝ることができる	いつもできる	80.0	73.4
	ときときどほめられる	66.7	70.0		ときどきできる	16.7	23.3
	あまりほめられない	33.3	20.0		あまりできない	3.3	3.3
④自分の考えや意見が言える	よく言う	16.7	33.3	⑭友だちがよくないことをしたら注意する	すぐ注意する	36.7	60.0
	ときどきいう	50.0	40.0		ときどき注意する	60.0	40.0
	あまりいえない	33.3	26.7		注意しない	3.3	0.0
⑤人の意見を最後まで聞ける	いつもできる	30.3	43.3	⑮みんなで協力して係りや当番の仕事する	協力する	63.3	70.0
	ときどきできる	63.3	56.7		ときどき協力する	36.7	30.0
	ほとんどできない	6.7	0		あまり協力しない	0.0	0.0
⑥係りや当番の仕事をがんばっている	思う	56.7	63.3	⑯みんなは，友だちが困っているときは助け合う	いつも助け合う	40.0	60.0
	ときどき思う	40.0	36.7		ときどき助け合う	56.7	36.7
	あまり思わない	3.3	0		あまり助け合わない	3.3	0.0
⑦友だちから注意されたら素直に聞くことができる	できる	27.6	73.3	⑰グループは，協力して勉強する	よく協力する	43.3	70.0
	ときどきできる	65.5	26.7		ときどき協力する	56.7	26.7
	あまりできない	6.9	0		あまり協力しない	0.0	3.3
⑧がんばれば勉強もも運動もできるようになる	思う	80.0	83.3	⑱私は３組でよかったと思う	思う	83.3	90.0
	ときどき思う	13.3	13.3		ときどき思う	10.0	6.7
	あまり思わない	6.7	3.3		あまり思わない	6.7	3.3
⑨クラスに仲のよい友だちがいる	４人以上	73.3	86.7	⑲学校に行くのが楽しい	楽しい	70.0	83.3
	３から２人	16.7	10.0		まあまあ楽しい	23.3	13.3
	１人	10.0	3.3		あまり楽しくない	6.7	3.3
⑩友達のいいところを知っている	よく知っている	23.3	40.0				
	知っている	56.7	50.0				
	あまり知らない	20.0	10.0				

アンケート調査の結果から事前と事後を比較すると次のようなことが分かった。

自己肯定度の項目では，「①自分のことがとてもすき」が23.4ポイント，「②わたしには，いいところがたくさんがある」が36.7ポイント高くなっている。これは，「ほめあげ大会」や「あなたの○○が好きです」で自分のよさを友達に教えてもらう体験をすることで，自分のよさに気づき，ほめられることのうれしさを体感できたと考えられる。それによって，自尊感情が高まり，自分に自信がついてきたと考えられる。また，友達のよさに目を向けることで，温かい人間関係が育ったと考えられ，仲のよい友達の人数も４人以上が13.4ポイント高くなっている。

他者肯定度の項目は，「⑩友達のいいところをたくさん知っている」が16.7ポイント高くなっている。「⑪友達は，私の考えや話をあまり聞かない」と答えた児童はいなかった。これは，話をすると周りの人は，聞いてくれるという意識の表れだと考えられる。

集団肯定度の項目では，「⑮みんなで協力して係や当番の仕事をする」，「⑯友だちが困っているときは助け合う」，「⑰協力して勉強する」の項目で数値が高くなっている。友達とふれあい，お互いのよさを認めることで，相手を思いやる心が育ってきたと考えられる。「⑱３組でよかったと思う」の項目で6.7ポイント，「⑲学校に行くのが楽しい」の項目で，13.3ポイント高くなっている。このことから，児童は，学級に対して受容的な雰囲気があると感じ，お互いのよさを認め合う豊かな人間関係が育ってきていると考えられる。また，８つの項目で否定的な回答が０％になっていることから，自分自身や友達を肯定的に見ることができるようになったと言える。

だが，①の問いに対して，「自分のことがあまり好きでない」と答えた児童が3.4ポイント高くなっている。また，「⑪みんなは，私の考えや話をよく聞いてくれる」が10ポイント,「⑬友達にごめんなさいと謝ることがいつでもできる」が6.6ポイント低くなっており，自尊感情・他者肯定度の弱まりを危惧させるものである。しかし，これは自己を認識する事によって，今の自分に満足せず，もっとよくなりたいという欲求がでてきたためだとも考えられる。そして，問⑪，問⑬については，他者に目を向けることができるようになったと同時に，自分の行動に対する気づきを深めることができるようになったと考える事もできる。

交友関係の調査結果においては，誰からも選択されてない児童が男子に２名いた。女子は全員が相互選択があり，集団としての親和性の深まりが見られた。被選択のないY君だが，友達と喧嘩をしないようになったという感想を書いていた。また，クラスのみんなからも受けいられるようになり，変容がうかがえる。今後，被選択者のいなかった児童に対して，その児童らが選択した友達を通して，交友関係を広げていくことが大切である。

Ⅳ　まとめと今後の課題

構成的グループ・エンカウンターを通して，児童の人間関係が深まり，お互いを認め合う学級づくりをテーマに研究を進めてきた。児童は，エクササイズに喜んで参加し，「楽しい」「もっとやりたい」という感想が多かった。各エクササイズを体験する中で，今まで話をしたこともない人とふれあうことができた。また，自己のよさに気づくことで自尊感情が高まり，友達のよさにも気づき，認めることができた。これらのことから構成的グループ・エンカウンターは，豊かな人間関係づくりに有効な方法であったと考えられる。

今回の実践は，演習が不慣れなため，シェアリングの時に，児童が自己を振り返るための適切な言葉かけや，全員でわかちあう時間の確保が十分にできなかった。また，不登校傾向にある児童や友達とうまく関わることのできない児童の自尊感情を高めようとしたが，集団の中では難しい面があった。

今後の課題として，

① 教師が，いろいろなエクササイズの実践方法や技法に習熟すること。

② 不登校傾向の児童や友達との関わり方で，気になる児童の自尊感情を高める支援のあり方

③ 児童の実態にあった構成的グループ・エンカウンターの年間を通した計画，道徳や特別活動，教科や総合的学習と関連させた実践のあり方

などがあげられる。これらの課題を解決し，実践につなげるために，さらに研修を深めていきたい。

＜主な参考文献＞

小泉英二編	『学校教育相談・初級講座』	学事出版	1990
國分康孝編	『学級担任のための育てるカウンセリング』	図書文化	1998